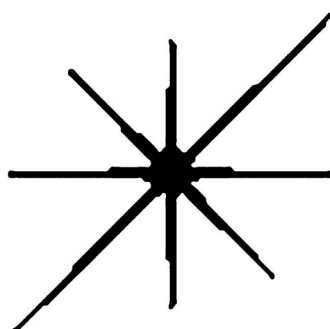


# コメット通信 57

[’25 年 4 月号]



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

## 目次

### 【特集 アフリカ哲学／文学】

#### 未来は過去から生み出される

中村隆之——3

#### 〈普遍的なもの〉の編み直し

——スレイマン・バシル・ジャーニュのリトル・ホープ

福島亮——5

#### 夢見るアフリカ

——アフリカン・スペキュラティヴ・フィクションの展開

栗飯原文子——8

#### 息の哲学

橋本栄莉——10

#### 哲学の転生，星々のアフリカ

真島一郎——12

【特集 アフリカ哲学／文学】

## 未来は過去から生み出される

中村隆之

最近「無知学（アグノトロジー）」という言葉をよく耳にするようになった。私なりの理解では、無知学はこれまで認識の対象にならなかった事柄を歴史的に考えるための発見論的な方法だ。この方法を手がかりに、これまで視界に入らなかったもの——さまざまなマイノリティや周縁化された問い——が主に歴史学の領域で注目されている。

哲学の領域でも、ちくま新書の「世界哲学史」シリーズの試みに見られるように、長らく西洋偏重だった哲学史を相対化する視点が打ち出され、アフリカ哲学もまた注目されるようになってきている。昨年にはアフリカ哲学を概説する新書（河野哲也『アフリカ哲学全史』）が出版されたり、カリブ海思想を扱った本（中村達『私が諸島である』）がサントリー学芸賞を受賞したりするなど、日本の人文知がこれまで不可視化されてきた対象を評価する時流が形成されている（私も『ゲンロン 17』にフランス語におけるアフリカ哲学の流れを辿った web 記事に基づく論考「アフリカ哲学への招待」を執筆した）。

もっとも、外部から絶えず新しいものを取り込んでいく日本の人文知は、概して流行好きで、健忘症に陥りがちだ。目新しく見える「アフリカ哲学」にも「カリブ海思想」にも、これらを紹介しようとしてきた日本語における過去の営為が存在したことを、私たちはどれほど覚えているだろうか。

日本では第三世界主義の潮流のなかでアフリカ諸国の政治指導者の諸著作、フランツ・ファノンのテキストなどが1960年代に紹介され、パン・アフリカ主義の政治思想研究やアフリカの宗教思想への文化人類学的アプローチも存在した。1990年代以降には「クレオール文学」の名の下でカリブ海のフランス語圏文学に注目が集まり、エドゥアール・グリッサンやマリーズ・コンデのテキストなどが翻訳されて現在に至る。しかし、クレオール文学が流行した1990年代から2000年代前半には、第三世界主義の潮流は社会主義の退潮とともに、当時はほぼ忘却されていた。そのような健忘を繰り返さず、日本語による人文知のなかにもすでにアフリカ人とアフロ・ディアスポラの文化的営為をめぐる仕事があることを想起したうえで、未来に向けて、アフリカ人とアフロ・ディアスポラをめぐる、いまだ知られざる思想や文学を紹介するべきではないだろうか。

「未来は過去から生み出される」——アフリカ系文化の叡智のなかで繰り返される、出自をもはや見定められないゆえに誰のものでもあるこの格言は、この世にはいない先祖たちの言葉を大切にすることからしか、未来の展望は切り拓けないとする教訓を含意する。西アフリカのマンデ系住民のあいだでグリオが語り継ぐスンジャタ叙事詩はその典型例だ。

しかし、こうした共同体の記憶を連綿と保持することは、アメリカ諸地域で奴隷とされた人々にとってはそもそも不可能だった。にもかかわらず、奴隷制の数世紀を経てもなお、アメリカ諸地域にはアフリカに由来する文化的要素が存続し続け、アフリカ系文化は人々の創意と工夫を通じて、植民者のもたらす技術や道具を流用しながら形成されていった。そのもっとも代表的なものはアメリカ合衆国、カリブ海、ブラジルに至るアフロ・ディアスポラ音楽としてのブラック・ミュージックである。英語圏での奴隷体験記を端緒とし、特に20世紀以降に本格化する、英語やフランス語などを用いた著述・創作活動もそうだ。アフロ・ディアスポラのこうした文化的営為は生きのびた者たちによって

次の世代に託されていった。ポスト奴隷制文化の基盤は奴隷制時代の精神文化にある以上、それは個人ではなく、まず共同体の遺産としてある。

それゆえ、アフリカ人とアフロ・ディアスポラの文化的営為を、私たちが翻訳を通じて、ずれや誤解を含みながらも日本語のなかで分かち持つさいに何より重要であるのは、私たちの感性的態度である。「こんな知られざる思想家がいたのか」や「こんな新しい発想があったのか」といった知の消費者的態度になるべくとどまることなく、その一歩も二歩も踏み出して、彼ら・彼女たちの表現がどのように生まれてきているのかを想像しながら受け止めてみてほしい。

アフロ・ディアスポラ文化に関して言えば、私たちは、W・E・B・デュボイスの『黒人のたましい』もエメ・セゼールの『帰郷ノート』もトニ・モリスンの『ビラヴド』も日本語訳のおかげで読める。しかし、これらの作品を読むさいに奴隷とされた人々の生と死について、どれほど思いを馳せることができるかによって、読み方の質が変わる。まったく違うと言っていい。それは現代アフリカ思想において注目すべきアシル・ンベンベ（ムベンベ）にしても言える。日本語に訳された『黒人理性批判』におけるンベンベ独特の記述が扱う、数世紀来の人種主義やアフリカのポストコロニアル状況を想像することが、彼の仕事の核心に触れるためには肝要だ。

アフリカ人とアフロ・ディアスポラの近代以降の文化的営為は西欧の植民地化と切り離せない。脱植民地化を目指すため、それがいかに純粋なものや土地伝来のものとして一部の思想家によって語られようとも、西欧がもたらした技術と道具を媒介としている以上、関係と混交のもとで成立している。奴隷制がそうであるように、植民地化の過去もまた打ち消しがたい、アフリカ人とアフロ・ディアスポラの未来の条件なのだ。だからこそ私たちは、絶望のなかに希望を託してきた人々の思想的営為から、私たちの個体の生や社会にとって切実に重要なことを学び（直し）うるのである。

執筆者について――

中村隆之（なかむらたかゆき） 1975年生まれ。現在、早稲田大学教授。専攻＝フランス語圏カリブ海文学・環大西洋文化研究。小社刊行の主な著書に、『[女性・戦争・植民地 1919-1939――両大戦間期フランスの表象](#)』（共著、2025年）、主な訳書に、エドゥアール・グリッサン『[痕跡](#)』（2016年）などがある。

【特集 アフリカ哲学／文学】

## 〈普遍的なもの〉の編み直し

——スレイマン・バシル・ジャーニュのリトル・ホープ

福島亮

今年 2025 年は、バンドン会議 70 周年である。1955 年 4 月 18 日から 24 日にかけて、インドネシア、ジャワ島西部の都市バンドンにアジア・アフリカから 29 カ国が集い、「バンドン精神」を掲げた。この精神を引き継ぐ形で、翌 1956 年には第一回黒人作家芸術家会議がパリで、また 1959 年には第二回黒人作家芸術家会議がローマで開催された。これら一連の会議は、アルジェリア戦争やアパルトヘイトへの抵抗運動とともに、脱植民地化の世界的なコンテクストを形作っている。

1955 年はヨーロッパ的普遍主義の「終焉」の年であり、そこから新たな〈普遍的なもの (l'universel)〉の編み直しが始まる——2024 年の秋に刊行された著書『普遍化する (Universaliser)』において、セネガル出身の哲学者スレイマン・バシル・ジャーニュは 1955 年をこのように位置付けている。バンドン会議と同じ年にセネガル北西の都市サン＝ルイで生まれ、現在コロンビア大学教授を務める彼は、論理学、イスラーム研究、バルクソン論、翻訳論といった多岐にわたる——しかし相互に有機的な関連を持つ——書物の著者として知られる。『普遍化する』は、これまでの一連の仕事を〈普遍的なもの〉という観点から統合するような著作であり、ほぼ同時に刊行されたフランソワーズ・ブルムとの対話『ウブントゥ』と併せて読むべき書物だろう。

表題に選ばれた「普遍化する」という動詞は、まだここにはない新たな〈普遍的なもの〉を求めようとするジャーニュの意図をよく表している。だが、それは論争的なタイトルでもある。なぜなら、〈普遍主義〉、〈普遍性〉、〈普遍的なもの〉といった一連の語は、長らく批判の対象となってきたからである。マルティニックの思想家エドゥアール・グリッサンは、昨年邦訳が刊行された『カリブ海序説』（原著 1981 年、邦訳 2024 年）のなかで、〈普遍的なもの〉を抽象化、一般化、全体化、そして透明性として徹底的に退け、警戒し、それに対して迂回、横断性、その場にとどまること、あるいは不透明性、そして〈関係〉といった語やイメージを提示した。

グリッサンの批判を理解したうえで、それでもなお「〈普遍的なもの〉という概念を手放してはならない」とジャーニュは主張する。なぜならば、普遍という概念を手放してしまえば、「ヒューマニティという最も重要な第一の普遍を考えることが阻害されるおそれがある」からである。彼が目指すのは、〈普遍的なもの〉を手放すのではなく、それを別様に編み直すことなのである。

そこで彼は、メルロ＝ポンティが「モースからレヴィ＝ストロースへ」（初出 1959 年、『シーニュ』（1960 年）収録）のなかで提唱する「側面的普遍 (l'universel latéral)」という概念に着目し、次のように記している。

上にそびえ立つような普遍性ではなく、斜めの (oblique)、あるいは横の (latéral) 普遍性をどう考えたら良いのか。メルロ＝ポンティは、「自己を他者によって、他者を自己によって絶えず試練にかける民族学的経験によって」私たちはそのような普遍を獲得すると記しており、それは「別の言語で話すことを学ぶのと同じようなものである」という。民族学的経験と言語の習得は、じっさい、それまで中心だと思っていたものから出ることを見せてくれるという共通点を持っている。自らを開くとは、自身のうちに他者がやってくるのを待ってその他者を受け入れるというだ

けではなく、自らの外に一步を踏み出すことが出会いの条件であるを知ったうえで他者に会いにゆくことなのである。<sup>(1)</sup>

自伝『私の記憶の薪』(2021年)によると、メルロ＝ポンティの「側面的普遍」の概念を(レヴィナスによる批判を経由して)ジャーニュが知ったのは、1984年、パイロイトでの研究滞在中だという。同じタイミングで彼はケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴとも知り合っており、このキクユ語作家との対話は複数言語と翻訳という問題系についてジャーニュが考える契機となった。私が興味を覚えるのは、ジャーニュが何度も引用し、深め、自らの思考の拠り所とするこのメルロ＝ポンティのテキストが、第二回黒人作家芸術家会議と同じ年、つまりバンドン会議以降の〈普遍的なもの〉の編み直しと同じ時期に『新フランス評論』(10月号)に掲載されたという事実である。メルロ＝ポンティが同時代の第三世界の動きをどう考えていたのか私は知らないのだが、時と場所を隔ててジャーニュがこのテキストを取り上げ、一種の翻訳論としてそれを展開していることは、豊かで深い哲学的な対話の実践であると言えるだろう。

このような対話から私が思い起こすのは、「新しい普遍性」をめぐるこれまでなされてきた先人たちの対話である。サイドは講演「ナショナリズム、人権、解釈」のなかで「アメリカ寄りの普遍性に対抗していまひとつの普遍性をわたしたちが構築するのがむづかしくなってしまった」(大橋洋一ほか訳)と記した。それを受けて徐京植は1993年から1998年にかけて『影書房通信』上で様々な論者との対話を繰り返し、『新しい普遍性へ』と題して1999年に出版している。パレスチナ北部ナザレで生まれた映画監督ミシェル・クレイフィとの対話のなかで徐は次のように述べている。

あなたは「<sup>エスポワール</sup>希望」という言葉を使われましたが、この言葉は漢字ではまれな望み、レア・ホープ、リトル・ホープと書くのです。[……]ただ望みはまだ絶たれていない、[……]私は、私とあなたとが、私たち朝鮮人とあなたがたパレスチナ人とが苦悩を共有できると気安く言うつもりはありません。しかし、このように互いに出会い、私たちの共同のイニシアティヴによって「新しい普遍性」の構想を打ち出すことに、まさしくリトル・ホープを持ち続けたいものです。<sup>(2)</sup>

ジャーニュによる〈普遍的なもの〉の編み直しもまた、そんなリトル・ホープの試みではないだろうか。「新しい普遍性」をめぐるこれまでなされてきた多くの対話の罅のなかでそれを受け止め、対話のうちに創造的に加わること。ジャーニュの仕事に触れながら、私はそんな対話の可能性に向かって自らを開いてみたいと思っている。

#### 【注】

- (1) Souleymane Bachir Diagne, *Universaliser : “L’humanité par les moyens d’humanité”*, Paris, Albin Michel, 2024, Chapitre 4 « De l’exceptionnalisme au latéralisme », Kobo, « Comment penser une universalité [...] qui en est la condition ».
- (2) 徐京植『新しい普遍性へ——徐京植対話集』影書房, 1999年, 336頁。

執筆者について——

福島亮(ふくしまりょう) 1991 年生まれ。現在, 富山大学人文学部専任講師。専攻=フランス語圏文学・思想。小社刊行の主な著書に、『[クレオール想像力——ネグリチュードから群島的思考へ](#)』（共著, 2020 年）, 主な訳書に, アラン・マバンク『アフリカ文学講義——植民地文学から世界へ文学へ』（共訳, みすず書房, 2022 年）などがあり, また, テキスト校訂として René Maran, *Le cycle africain* (CNRS, 2024) に携わる。

【特集 アフリカ哲学／文学】

## 夢見るアフリカ

——アフリカン・スペキュラティヴ・フィクションの展開

栗飯原文子

スペキュラティヴ・フィクションは近年のアフリカ文学でもっとも勢いのあるジャンルだ。21世紀に入って奨励される傾向が生まれ、2010年代以降に急展開を見せている。たとえば、2014年、ナイジェリアの作家たちを中心にウェブマガジン『オメナナ』が創刊され、さまざまな国、地域の作家が活躍する場となっている。2016年にはアフリカン・スペキュラティヴ・フィクション・ソサイエティが創設され、翌年、長編、中編、短編小説、グラフィック・ノベルの4つのカテゴリーで最優秀賞を授与するノモ賞が設置された。そうしたなか、ヒューゴー賞、ネビュラ賞、アーサー・C・クラーク賞などの主要SF賞にノミネートされる作家がますます増えている。

このスペキュラティヴ・フィクションの大きな波は世界各地に身を置くアフリカの作家や編集者の多大な努力により意識的に作られてきた。国境を越えた編集・出版体制、ウェブベースの活動により、大陸内外が一体となってコミュニティが広がっているような印象を受ける。まさしくアフリカ文学の現在の姿だ。

いっぽう、スペキュラティヴ・フィクションの隆盛を最近の現象とみなすべきではないと述べる作家や批評家もいる。つまり、アフリカではかねてからスペキュラティヴな作品は存在していたという。重要なのは、そもそも多様性豊かなサイエンス・フィクションの幅をいっそう拡大するために、ファンタジーやホラーなども含むスペキュラティヴというタームが大切にされていることだろう。そうすれば、これまでのアフリカ文学の非リアリズムの伝統を振り返り、魔術的リアリズムやアヴァンギャルド、はたまた分類不可能と言われてきた過去の作品を再評価し、新たにスペキュラティヴ・フィクションの系譜を打ち立てることができる。21世紀の“流行”のもとで、文学史や批評も同時に見直されているのは意義深い。

系譜化の作業とも密接に関係するのは、国際的に著名なナイジェリア系作家ンネディ・オコラフォーが提唱するアフリカンフューチャリズムという概念である。アフリカン・スペキュラティヴ・フィクションの活況は、アメリカでのアフロフューチャリズムの再検討の流れに影響を受けたものだとする見解があり、両者が混同されることも多い。オコラフォーが強調するのは、アフロフューチャリズムが奴隷としてアメリカ大陸に連行されたアフリカン・アメリカンの表現にもとづく概念であるのに対して、アフリカンフューチャリズムはアフリカの歴史、神話、場所、文化にしっかりと根差しているという点だ。

興味深いことに、同じく2010年代から、アフリカに出自を持つ作家、とりわけ女性作家が、遠い過去から近現代に至るまでの歴史のさまざまな段階に取り組み、次々に新しい歴史小説を発表してきた。一見すると、この2つのジャンルはそれぞれ異なる方向性と目的を備えているようだが、実は大陸の経験と歴史をどう想像し直すかという問題意識を共有している。アフリカの歴史小説の多くは神話や幻想的な要素、すなわちスペキュラティヴな要素を組み込み、アフリカン・スペキュラティヴ・フィクションは歴史と社会に根差しつつ別様の現実や未来の展望を描く。

二ジャンルの同時代性と隣接性を象徴するのがザンビア出身のナムワリ・サーベルによる『オールド・ドリフト』（2019年）だ。2020年度のアーサー・C・クラーク賞を受賞していることからわかる



ように、この作品はSF小説とみなされる。だが『オールド・ドリフト』は歴史小説でもある。三世代、三家族のサーガを描き、植民地主義の到来、植民地支配からの脱却、国家独立、独立後の紆余曲折という歴史の軸をたどりながらザンビア史を語り直す。そのなかでファンタスティックな描写とSFのモチーフが織り交ぜられ、最後は近未来で幕を閉じる。

このような作品群の先駆けとして、コンゴ共和国のエマニュエル・ドンガラ短編小説「ジャズと椰子酒」(1982年)が挙げられる。当時の冷戦体制の現実と歴史認識を覆すSFの良作だ。あるとき、コンゴに宇宙人が襲来する。国際会議が開かれるも、西側、東側の大国はいずれも身勝手に役に立たない。最終的にケニア代表の意見が満場一致で採択される。アフリカの伝統に従い、大木の下で椰子酒を酌み交わし、話し合いをしようというのだ。宇宙人はジャズと椰子酒を気に入り、地球支配を進めていく。それから10年。コンゴの首都ブラザヴィルに全世界の国家元首が集まってジャズと椰子酒の宴が催される。そしてジャズ音楽家で、のちにアフロフューチャリズムの原点とされるサン・ラが黒人初の合衆国大統領に就任する——。アフリカ由来の叡智と文化が地球を救い、国際舞台の中心はもはやニューヨークやロンドンではなく、ブラザヴィルなのだ。

アフリカン・スペキュラティヴ・フィクションは異なる歴史の可能性と大陸の未来に思いを馳せる。そこには明日の世界への夢と祈りがある。今後も、目の覚めるような、魅力溢れる作品が続々と生み出されるだろう。SF界の中心がアフリカになる日も近い。

執筆者について——

栗飯原文子(あいはいらあやこ) 現在、法政大学国際文化学部教授。専攻＝アフリカ文学・文化研究。小社刊行の主な訳書に、ヴィジャイ・ブラシャド『[褐色の世界史——第三世界とはなにか](#)』(2013年／2023年[増補新版])がある。

【特集 アフリカ哲学／文学】

## 息の哲学

橋本栄莉

家畜を愛でる唄、天や神々への祈りと儀礼、神話や歴史を物語る太鼓のリズム、それとともに揺れる女性たちの腰、窮状を乗り越えるための知略……。

「アフリカの哲学」と聞いて私がまず思い浮かべるのは、名もなき人々のこうした日常の営みである。もちろん、アフリカにも有名な哲学者や文学者はいる。しかし、「アフリカの」と頭につくとき、特定の人物や作品がカバーできる範囲はあまりに狭い。

私は哲学者ではないから、哲学と思想の違いは何か、それは本当に哲学と呼べるのか、という議論をすることはできない。ただ、西欧中心に発展してきた哲学を、アフリカには「ない」というのも横暴だし、また逆に「ある」と主張しすぎるのも、西欧を基準とする世界の承認をどこかで期待しているようでいただけない。

わたしが2年近く滞在した、東アフリカに位置する南スーダン共和国の牧畜社会で経験した哲学のようなもの。それは、自然環境の厳しい大地に生きる遊牧民特有のものの見方のようなものでもあるし、一人で死んでいかななくてはならない悲しい人間たちに共通する世界とのコミュニケーションの取り方でもあった。

南スーダンのナイル川流域に暮らす、牛の遊牧を営むヌエルの人々は、日常に生起するさまざまな出来事をクウォスとの関係で物語る。クウォスは天災や病気、人間の幸・不幸すべてに関与する。クウォスは名詞で用いられるときには、神や精霊など、神的なるものを指す。動詞で用いられるときには、たとえば牧童が便秘の牛の肛門に強く息を吹き込む、といった場面で使われるような「息を強く吹く」という意味となる。

私は、クウォスという語の動詞的用法と、名詞の意味とはつながりがあると考えている。私が出会ったあるヌエルの若者は、クウォスのイメージを次のように語った。

クウォスは風になってやってくる。そして空気になり、息として私たちの体の内側に入る。そしてまた息となって、体の外側に出ていって、それは風となる。だからすべての中にクウォスはいる。クウォスは一つだが、いろいろな色を持っている。私たちはその色を決めることはできない。空気が無ければ私たちは死んでしまうので、このいのちはクウォスからの贈り物だ。クウォスが私たちの中にいるということは、私たちが生きている、ということから分かる。私たちの歌がクウォスに聞こえたなら、私たちが望んでいることがなにか起こるだろう。

空気と風、そして息。存在する場所に依拠して名前を変えるこれらの気体は、私たちのいのちを支えるものであると同時に、いのちそのものだ。ホームステイ先の兄は、遠くで生じた小さな竜巻を見て、「今、誰かのいのちが困っている」と言った。

息をいのちそのものとする考え方は、隣接する民族集団のディンカにも存在する。ディンカ語で「生命」を意味するウェイということばは、そのまま「呼吸」という意味でもある。ウェイは、生きている者の動きの源である。人は死や病気に対して示される抵抗力に応じた量のウェイを持っていて、成

人は赤子より多くのウェイを持ち、ウェイは死と共に去る。

この特性からすると、息は「魂 (soul)」または「霊 (spirit)」とも訳せるかもしれない。しかし、息は神のような超常的な存在というよりも、人間と神なるもの、そして世界のつながりの証として語られるので、これらの語にぴったりとははまらない。それは、抽象的な神観念・文化的概念であると同時に、人間であればだれでも信じるに足る、いのちそれ自体の呼び名である。

紛争国家南スーダンの頼りない政府や軍人たちに対し、地域の人々のあいだで影響力を持っているのが、クウォスのことばを代弁すると見なされている土着の予言者である。「強い息を持つ」予言者の歌は、クウォスに届きやすい。予言の歌を歌い、予言者に従って戦いへと身を投じる人間たちの姿は、「未開信仰」を妄信する「発展途上」の人々に映る。しかし、人々が問うているのは、自らのいのち、息のしやすさを、誰がより持続可能にしてくれるのかということである。この問いは、果たして彼らだけのユニークな問いであろうか？

人間の身体と世界、そして神なるものを媒介し駆け巡る、一にして多、そして全でもある無色透明の気体。息の哲学は、神と人間のみならず、内と外、我と他、人間と世界といった、人間が歴史の中で構築してきたあらゆる境界線、分断を否定する。コロナ禍を経て、ようやく私たちは、いかに自分たちの息が世界を脅かし、また世界に脅かされているのかを知った。今日の私たちのいのちをささえる息や風、そして空気は果たして清らかだろうか？ さまざまな分断が世界を揺るがす現在、息の哲学が物語るものは少なくないはずだ。

執筆者について——

橋本栄莉（はしもと えり） 1985年生まれ。現在、立教大学文学部教授。専攻＝文化人類学・東アフリカ民族誌学。主な著書に、『タマリンドの木に集う難民たち——南スーダン紛争後社会の民族誌』（2024年）、『エ・クウォス——南スーダン、ヌエル社会における予言と受難の民族誌』（2018年、いずれも九州大学出版会）などがある。

【特集 アフリカ哲学／文学】

## 哲学の転生，星々のアフリカ

真島一郎

熱帯林につづくこの村で，祭宴の勢いが収まらない。何があったのか，ヤシ酒をひっそりあおる小柄な老人を悪酔いした若者たちがとり囲み，土地のことばで荒く挑発するさまが，酔った横目にぼんやり映る。と，ある時をさかいに老人の形相は一変し，驚くほどの若さで広場へ跳ぶや，もう独り舞いだしていた。掟破りの所作の重みに，座は即刻凍りつく。村で広言してはならない仮面着用の聖職を子に継がせたのち，酒のはずみでいま老いぼれと罵られた男が，面も着けずに出現させてしまった異界の霊。面の裏側で隠されるべき，舞う人間の引き攀った顔面が風にふれている。能でいえば直面にあたる呪詛をコートディヴォワールで目にしたのは，後にも先にも30年前のこの白昼，一度きりだった。

セネガルの固有名は，[e]に近い音の表記に必ずしもアクサン・グラーヴを付さない。カナ表記の政治性には，セネガルで長く暮らしはじめるまで私自身，あまりに頓着せず流してきた。旧宗主国本意の訳業が続いたとはいえ，ここ東アジアでセンベヌ・ウスマンの姓をサンベヌと記すひとはもういない。たんに名の表記という以上に，サルトル経由「サンゴール」の屈折した翻訳圏から解かれた場で，解説書の記号などではない直面の彼，レオポール・セダール・センゴールの生に私たちが向きあう準備はいつできるだろう。さもなくば，シェク・アンタ・ジョップはおろか，アフリカの「真の自立」を懸けて当のセンゴールと対決し，やがて〈ダカールの68年5月〉へとなだれこんでいく銘記すべき戦後パン・アフリカニズムの思想など，歴史の余白にわけなく立ち消えていくだろう<sup>(1)</sup>。

「アフリカ哲学」の枠づけは，その意味でさらに枷となる。ハイデガーの1964年講演「哲学の終焉と思考の課題」に演題どおり向きあう死の直前のナンシーは，失調をきたした学彼岸に，〈存在者〉としてでない非西洋の現前，いかなる媒介も還元も不可能な〈存在＝異他論理<sup>アロロジ</sup>〉との闘いを見つめていた。希望の内実を卓抜にも「哲学の転生」と名づける西谷の思考を私なりに理解すれば，非西洋との〈分有〉の試練に耐え，翻訳＝分離＝〈共〉のあわいから転生をとげるかもしれない何ごとかに，またしてもテツガクの名をあてがう身ぶりに自由はない<sup>(2)</sup>。初期デリダの目覚ましい思考にさえサイドが抱いた苛立ち，あるいは「世界文学」の動向にクツエーがかねて抱く疑念の宛先は，非西洋の民主的实践を「あいだの空間」で確かに〈分有〉しながら，知識人が占有する「アテネ以来」のテキストの乗り継ぎだけで民主主義の概念が成ったと信ずるロゴクラシーの覇権とその高踏ぶり，反動ぶりにどこかで通じている<sup>(3)</sup>。メトロポールの図書館に堆積するテキストの歴史と混同しないかぎり，だが思考と実践の歴史に名は必要だったのか。この場合にきぎって〈署名〉の自然性も問われないのか。

反国家を志向するパラグアイ先住民の「無意識」という表現によってクラストルが私たちに突きつけたのは，むしろオキシデントのテキストの引き継ぎが演出した「国家」の枠組を離れてはもう何も思考しえないほどの検閲と抑圧を浴びてきた，私たち自身の政治的無意識のほうである。その近代政体の根源を支えてきた「人種」や「ニグロ」の絶対的差異に抗うために，だからンベンベも，世界のアフリカ化が苛酷に進行する今日では，「世界がニグロになる」想像力をあえて読み手に求めていた<sup>(4)</sup>。ならば，これとは逆の地平から，無意識という危うい表現でしかさしあたり名指しえぬ何かを時の転

から解くために、「アフリカ人である私たち」の想像力を、異他論理との厳しい〈分有〉に先だっていちど開いておく可能性も考えられよう。アフリカの諸社会に根づく熟議の思想、口承をふまえたコール・アンド・リスポンスの思想が、ソクラテスの対話術を引き合いに「再評価」されたりする倒錯は、たとえば『忘れられた日本人』で綴られる対馬の長談義が、思考のうちから文字どおり忘却された帰結にほかならない。

書物の権威に当の書物をつうじて逆らいながら、読み手との黙せるコール・アンド・リスポンスに進んで乗りだす臂力をそなえた語り手＝書き手の存在が重要である。フランシス・ニャムンジョは、単独であろうとする人間存在の、または世界自体の本来的な「不完全性」を柱にすえて、西洋対アフリカといういづれ不完全な人間たちの対立をコンヴィヴィアルに包摂する思想を、破格の視野で展開してきた。国際的な影響力をもつ著作群のなかでも、ビアフラをめぐりやがて深刻な亀裂が走るナイジェリア文壇で早くから特異な位置を占めてきた天才の作品群に、「不完全性」のあるべき姿を学びとる彼のチュツオーラ論、あるいはアビジャン発のドラマ作品に触発された独自のウブントゥ論が注目される<sup>(5)</sup>。

ニャムンジョの延長線上で大切に思える語り手は、アカデミアの列聖となるべき個人にかぎらない。「人類の星の時間」は、たしかに光芒の刹那にすぎない。しかしTAZ さながらにアフリカ大陸で明滅をやめない星々があるからこそ、書物では覆いきれない思考の記憶も繋がれていく。トマ・サンカラは、1987年のOAU総会席上で、いまや伝説と化した「血の債務」をめぐる熱弁をふるったわずか3カ月後に惨殺された。さもなくば、「アフリカのゲバラ」がけっして第二のセク・トゥーレに成り果てなかったとは断言できないが、村落部の女性解放にも意を尽くした彼は、抑圧に徹底して抗する知、社会的公正を照らす知の使者として、今日も西アフリカ各国の人びとに鮮烈な記憶をとどめている。ニグロ化した世界で生かされ、かつアフリカ人である私たちは、その秘密に翻訳をつうじ、少しでも近づいておく必要がある<sup>(6)</sup>。

若き日に京都の学生有志と映画制作を手がけたモリ・トラオレは、自国が内戦の渦中にあった2005年、新たな戦争論の上映を兼ねて来日した。このときモリは、人間の社会にとり文字こそが豊かな想像力とともに強烈な排除と狂気を産出するという年来の思想を敷衍して、内戦終結後のコートディヴォワール共和国憲法を、文字ではなく映像で起草すべきだとくりかえし訴えた。奥深い書の森の遊動者で舞台俳優でもある彼が、生そのものとイメージ＝媒体の連関から自己省察をかさね、断章形式で書きあげた2000年の単著は未訳にとどまっている<sup>(7)</sup>。政治を政治家に任せてはいけないうのと同じく、学者こそが学問を、いや考えること、問いつづけることを先導するのだと思いこむ不遜からは、モリが考えたとおり、あれこれの学問区分や概念規定に名をかりた排除しか生じない。書籍の版元にとっては、だからこそその読書であり、また翻訳でもあるのだと思う。

#### 【注】

- (1) Amady Aly Dieng, *Hegel et l'Afrique noire: Hegel était-il raciste ?*, Dakar, CODESRIA, 2006. Amady Aly Dieng, *Les Grands Combats de la Fédération des étudiants d'Afrique noire*, Paris, L'Harmattan, 2009. Majhemout Diop, *Mémoires de luttres: Textes pour servir à l'histoire du Parti Africain de l'Indépendance*, Paris, Présence Africaine, 2007. Omar Gueye, *Mai 1968 au Sénégal: Senghor face aux étudiants et au mouvement syndical*, Paris, Editions Karthala, 2017.
- (2) ジャン＝リュック・ナンシー「哲学の終焉と思考の課題」柿並良佑訳、『思想』第1172号、2021年、

- 7-17 頁。西谷修「哲学の転生，または〈分有〉の未来」，西山雄二・柿並良佑編『ジャン＝リュック・ナンシーの哲学——共同性，意味，世界』読書人，2023 年，43-63 頁。
- (3) エドワード・サイード『世界・テキスト・批評家』山形和美訳，法政大学出版局，1995 年，第 9 章。くぼたのぞみ『J・M・クッツェーと真実』白水社，2021 年，第 4 章。デヴィッド・グレーバー『民主主義の非西洋起源について——「あいだ」の空間の民主主義』片岡大右訳，以文社，2020 年。
- (4) アシル・ムベンベ『黒人理性批判』宇野邦一訳，講談社，2024 年，序章。
- (5) Francis B. Nyamnjoh, *Drinking from the Cosmic Gourd: How Amos Tutuola Can Change Our Minds*, Bamenda, Langaa Research & Publishing CIG, 2017. Francis B. Nyamnjoh, « *C'est l'homme qui fait l'homme* »: *Cul-de-sac Ubuntu-ism in Côte d'Ivoire*, Bamenda, Langaa Research & Publishing CIG, 2015.
- (6) Thomas Sankara, *Thomas Sankara parle: La révolution au Burkina Faso 1983-1987*, New York, Pathfinder, 2007. Bruno Jaffré, *Biographie de Thomas Sankara: La patrie ou la mort... (Nouvelle édition revue et augmentée)*, Paris, L'Harmattan, 2007. 太田昌国『【極私的】60 年代追憶——精神のリレーのために』インパクト出版会，2014 年，第 2 章。
- (7) 《L'homme d'ailleurs／車に轢かれた犬》(監督モリ・トラオレ，1979 年，86 分，カラー，ジンバブエ・プロダクション，京都)。Mory Traoré, *Esquisse vers l'Eloge du Tribalisme*, Tokyo, ILCAA, 2000. 彼の映像への記憶は，以下にも残る。多和田葉子『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』岩波現代文庫，2012 年，第 1 章。

執筆者について——

真島一郎（まじまいちろう） 1962 年生まれ。現在，東京外国語大学教授。専攻＝文化人類学，西アフリカ民族誌学。主な著書に，『二〇世紀〈アフリカ〉の個体形成——南北アメリカ・カリブ・アフリカからの問い』（編著，平凡社，2011 年），主な訳書に，ジャック・ドンズロ『社会的なものの発明——政治的熱情の凋落をめぐる試論』（インスクリプト，2020 年）などがある。

# 水声社の新刊

(2025 / 4 / 30)

## 【5月の新刊（予定）】

### 漂流する思考

新形信和

【5.1 発売】

▶日本人の思考は漂流する。思考がむなしくさまよい、思考が本来持っている現実を変革する力を失い、現状に流される。現在の日本のさまざまな領域に見られる停滞はこのような思考の漂流によって生じているのではなかろうか。

46 判上製 / 288 頁 / 2500 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0868-7



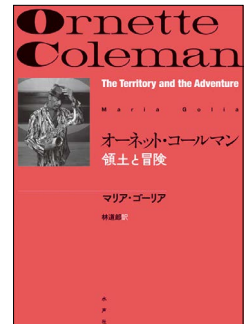
### オーネット・コールマン——領土と冒険

マリア・ゴーリア 林道郎訳

【5.1 発売】

▶前人未踏の領域を切り開き、20 世紀を震撼させた《フリー・ジャズの闘士》。同時代の広大な社会・文化的ネットワークを踏破し、膨大な証言の中から新たなオーネット像を描き出す、画期的評伝！

A5 判並製 / 381 頁 / 4000 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0866-3



### 中村真一郎手帖 20

中村真一郎の会編

【5.6 発売】

▶東西古典詩の翻訳『古韻余響』から訳詩家としての中村真一郎の姿に迫る講演、中村の『王朝文学論』を読み解き「ロマネスク」をめぐるその文学観を明らかにする講演ほか、論考・エッセイを多数収録。

A5 判並製 / 88 頁 / 1000 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0867-0



### 風に舞う塵のように

《フィクションのエル・ドラード》

レオナルド・パドゥーラ 寺尾隆吉訳

【5.26 発売】

▶キューバから亡命した若い男とアメリカ生まれのキューバ系女性が出会い、互いのルーツを確かめあうなかで、キューバの光と闇を生きたある一族の歴史に行きあたる——壮大なスケールで社会主義国家キューバに生き、そして離散した人々の生を描いてベストセラーとなった〈キューバ国民たちの年代記〉。

46 判上製 / 684 頁 / 4000 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0870-0



# ベッドがあれば

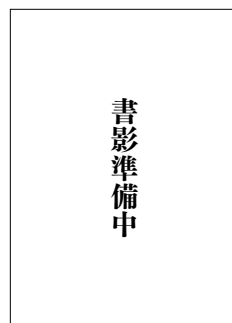
《叢書エル・アトラス》

アブデッラー・ターイア 鵜戸聡訳

【5.26 発売】

▶「僕は牢獄にいた、ますます牢獄の中に。西洋には自由があるって？ どんな自由が？」母や兄への官能的な親密さに満ちた幼年時代を通りぬけて、フランス語の知に魅惑されたモロッコの若者は、地中海の両岸で「他者」となる。二重の疎外からの救済を描く著者の自伝的小説。

46 判上製／160 頁／2000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0872-4



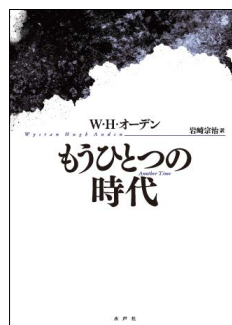
# もうひとつの時代

W・H・オーデン 岩崎宗治訳

【5.26 発売】

▶20 世紀最大の詩人の一人が、1930 年代後半の〈危機の時代〉に終生の伴侶となるチェスター・カルマンに捧げた詩集。人間の狂信と抑圧を軽妙に語り、第二次世界大戦の前夜を描きながら、世紀をこえて現代の混迷を〈予言〉し、そしてイエイツ、フロイトを追悼する……。

A5 判上製／240 頁／4000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0860-1



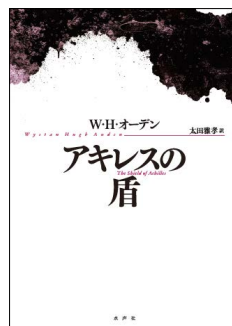
# アキレスの盾

W・H・オーデン 太田雅孝訳

【5.26 発売】

▶今、世界各地でくりひろげられる破壊と流血、生命に対する抑圧は、オーデンの詩篇「アキレスの盾」に予言されているのではないだろうか？ 第二次世界大戦前夜の〈危機の時代〉に、自然と人間との関わり、さまざまな愛や美のかたち、そして負の歴史を繰り返す人間の弱さを見据えて祈る著者の代表作。

A5 判上製／232 頁／4000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0859-5



# ベルナール・ファイ ―ある対独協力知識人の肖像

《叢書言語の政治》

アントワヌ・コンパニョン 今井勉訳

【5.26 発売】

▶戦間期フランスの論壇の頂点にまで登り詰め、ブルーストやジッドとも親しく交わった前衛芸術の擁護者、ファイ。輝かしい経歴を歩みながら、ナチス・ドイツへの協力を惜しむことも悔やむこともなかった反動知識人のスキャンダルの内幕とは？ 文学と政治が交錯する深層に迫る歴史叙述。

A5 判上製／304 頁＋別丁 8 頁／6000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0869-4





# 運慶・ルオー・ブレイク

——岡本謙次郎美術批評集成

千石英世＋鈴木重雄編

【5.26 発売】

▶戦後から昭和後半にかけ、美術論・美術批評を精力的に寄稿し、展覧会のキュレーションも手がけた著者の代表作『運慶論』『ルオー』『ブレイク』、そして親交のあった美術家・斎藤義重、小説家・小島信夫をめぐるエッセイも付した渾身の批評選集。

A5 判上製／358 頁／6000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0855-7



【4 月の新刊（既刊）】

## ポップカルチャーからみた日本

《大手前大学比較文化叢書》

石毛弓編

【4.2 発売】

▶日本のマンガ、アニメ、ゲームをはじめとするポップカルチャーは、海外でどのように受容され、また、海外の文化からどのような影響を受けているのか。海外のマンガ・アニメ研究者の視点を取り入れつつ、異文化交流をキーワードに、現代日本のポップカルチャーの諸相に迫る。

A5 判上製／168 頁／2500 円＋税 ISBN：978-4-8010-0852-6



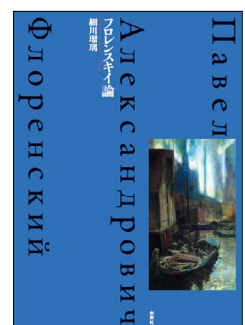
## フロレンスキイ論

細川瑠璃

【4.7 発売】

▶西欧絵画の遠近法と異なる中世イコンの「逆遠近法」を解き明かしたことで知られるロシア正教の司祭フロレンスキイ。その美学・神学・数学的著作を貫く〈形〉、〈不連続性〉、〈個と全の対立〉を巡る思想を明らかにし、二十世紀ロシアの最も謎めいた思想家の全体像に光を当てる、初のモノグラフ。

A5 判上製／310 頁＋4C 別丁 4 頁／5000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0862-5



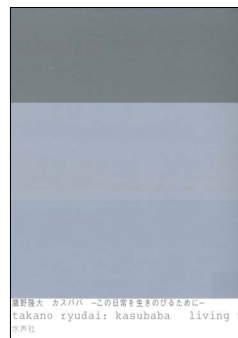
# 鷹野隆大 カスババ—この日常を生きのびるために—

東京都写真美術館編

【4.9 発売】

▶ジェンダー、身体、（カスのような）場所、影……〈カスババ〉、〈おれと〉、〈男の乗り方〉といった代表作から、未発表作品まで、第31回木村伊兵衛写真賞受賞作家の全貌に迫る。カラー作品256ページ収録！ 執筆＝鷹野隆大、沢山遼、高嶋慈、伊藤亜紗、遠藤みゆき。

A5判並製／358頁／3600円＋税 ISBN：978-4-8010-0838-0



## 小説と映画の修辞学【改訂決定版】

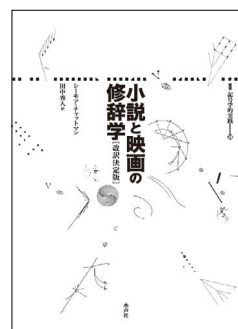
《記号学的実践叢書》

シーモア・チャットマン 田中秀人訳

【4.12 発売】

▶ブース、バルト、ジュネットといった、先行する主要な物語理論家たちを継承する博覧強記の物語学者チャットマンが、「小説」と「映画」における多くの作品を緻密に分析すると同時に、「物語学」における既成のタームを批判的に検討し、さらには「物語学」そのものをも問い直そうとする、画期的実践の書。

A5判上製／349頁／6000円＋税 ISBN：978-4-8010-0621-8



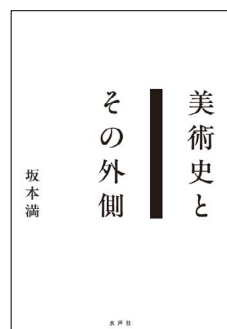
## 美術史とその外側

坂本満

【4.16 発売】

▶影絵、だまし絵、解剖図、民衆版画、二重螺旋階段、ルイ14世の戦争ゲーム……こり固まった教養や堅苦しい能書きにしばられず、自由な心で率直に作品と向き合えば、美術史の〈外側〉にも豊かな作品世界が広がっている。古今東西を軽やかに往還する、作品との開かれた出会いへの誘い。

46判並製／383頁＋4C別丁16頁／3500円＋税 ISBN：978-4-8010-0865-6



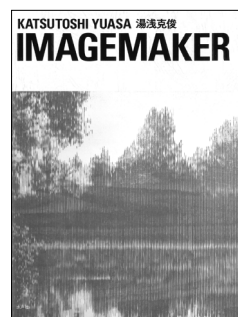
## KATSUTOSHI YUASA: IMAGEMAKER

湯浅克俊

【4.18 発売】

▶写真から絵画へ、絵画から木版画へ、木版画からイメージへ。木版画を主要な表現手段としながらも、様々な素材、手法で新たなイメージに挑み続ける湯浅克俊の作品集。

B5版変型上製／258頁／5000円＋税 ISBN：978-4-8010-0864-9



## 水声社

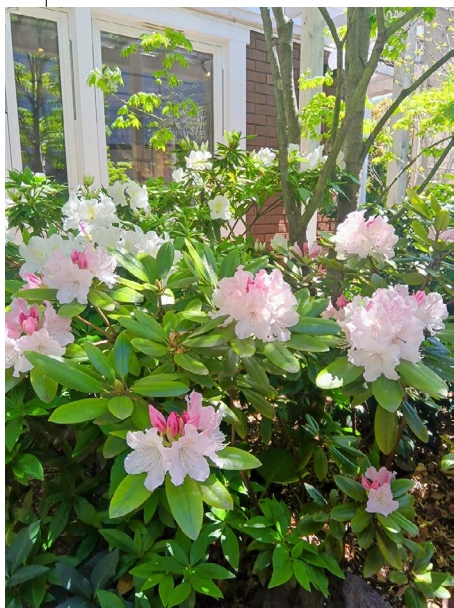
東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suisaisha.net

ブックカフェ



本の庭  
le Jardin des livres

# 本の庭



緑と本に囲まれて、憩いのひとときをお過ごしいただける、都内でもまだ緑の多く残る山王のブックカフェ『本の庭』に初夏がやってきました。メジロ、キジバト、ヒヨドリ、シジュウカラも訪れます。『本の庭』では、水声社の本を展示販売しており、新刊は本屋さんの店頭と並ぶより、10日から1週間ほど早く入荷します。「できる限り手作りの物を」をモットーに、パニーニやケーキ、など、店内の本をご自由にお読みいただきながら召しあがれる軽食、焼菓子や各種スイーツやお飲み物をご用意しています。車椅子やベビーカーでお入りいただけます。テラスでは、ワンちゃんと共に過ごすことができます。

## 【カフェの情報】

住所：東京都大田区山王 1 - 22 - 16

アクセス：JR 京浜東北線大森駅 山王北口より徒歩7分

営業時間：木・金 12時～18時、土・日 11時～18時。ただし第1・第3日曜日は12時開店です。

営業日：木・金・土・日（詳しくはInstagramをご確認ください。）5月30日金曜日のみ午後4時閉店です。

臨時休業：4月24日木曜日は臨時休業です。（詳しくはInstagramをご確認ください。）

TEL：070 - 4171 - 0860

店内設備：スロープを設置できますので、車椅子のままご来店いただけます。

Free Wi-Fi



本の庭  
le Jardin des livres

(広告)